公立大学法人　大分県立看護科学大学

創立20周年記念誌

20th Anniversary

Oita University of Nursing and Health Sciences

未来の君たちへ、
播いた種が花咲くときに

大分県立看護科学大学
創立20周年を迎えて

公立大学法人大分県立看護科学大学
理事長・学長
村嶋　幸代

平成10年に開学した本学は、今年、20周年を迎えることができました。本学を創設し、導き、支えてくださった多くの方々に、心から感謝申し上げます。

この間、1,393人の学部卒業生、172人の修士、18人の博士課程修了生、そして訪問看護認定看護師43人が巣立ちました。卒業生・修了生たちは、大分県を始め、全国で活躍しています。

20年間で、本学は、いくつかの「日本初」を実現してきました。開学後、順調に修士課程・博士課程を設置した後、平成16年には将来の助産学の大学院化を目指して学部と修士の同時入学を実施しました。平成20年には、修士課程に実践者養成コースを設置し、ナースプラクティショナー（NP：診療看護師）教育を日本で初めて開始しました。看護管理・リカレントコースを始め、修士課程は、看護職の学び直しの場としても機能しています。

平成23年には、保健師教育を修士課程に移行すると共に、学部４年間の看護師教育に踏み切りました。修士課程の保健師教

育と大学４年間を通した看護師教育によって、実力ある保健師・看護師を教育することができます。この教育体系は徐々に全国に広がりを見せています。平成27年からは、養護教諭一種の養成も実施しました。

開学の翌年から開始した看護国際フォーラムは、大分県看護協会との共同プログラムとして毎年開催し、私たちの視野を広げてきました。ここ数年は、公開講座も一つのテーマを定めて、半日かけて実施するように致しました。近年は看護の立場から「ものづくり」にも挑戦しています。

これらの歩みは、今迄の教職員の努力はもちろんですが、大分県や多くの医療関係者、特に、実習をお引き受けくださった施設の皆様、また、地域で支えてくださった本当に多くの方々のご尽力によるものです。海外からも、ソウル大学看護学部からは、開学当初から国際看護学の教授をお迎えし、育てていただきました。また、本学が全国で初めて実施した取組（大学院修士課程でのNPや保健師の教育）に関しても、多くの方々にご支援をいただきました。心から感謝申し上げます。

20周年は、本学の歩みを振り返り、建学の精神「看護学の考究」「心豊かな人材の育成」「地域社会への貢献」に立ち返る機会でもあります。「看護学の創造を図ると共に、看護・保健・医療を担う豊かな人間性を持つ看護職とそのリーダーを育成し、安全・安心な地域社会の暮らしと持続的な発展に貢献する」という本学の使命を再認識し、卒業生・修了生等の連帯を図り、全国と世界に情報発信していきたいと思います。

大分県立看護科学大学は、これからも、看護学の発展を通して、社会に貢献してまいります。ご指導・ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

祝　辞

大分県知事
広瀬　勝貞

大分県立看護科学大学が創立20周年を迎えましたことをお喜び申し上げます。

本学は、平成10年４月に開学し、「看護学の考究」「心豊かな人材の育成」「地域社会への貢献」を建学の精神に掲げ、大分県の看護および看護教育の拠点としての歩みをスタートいたしました。

開学以来、少子高齢化の進展や、医療の高度化などの社会情勢の変化を的確に捉え、多様なニーズに応えられる判断力と実践力を兼ね備えた看護職の育成に取り組んできました。平成20年４月には、全国に先駆けてNP養成コースを大学院（修士課程）に設置し、その研究実績は平成27年に「特定行為」の法制化につながるなど、我が国の看護職の役割拡大に大きく寄与するとともに、着実に成果をあげています。

また、地域住民の協力を得て行っている「看護学生による予防的家庭訪問実習」は、平成25年度に文部科学省の地（知）の拠点整備事業に採択されました。この取り組みは、今後の地域包括ケアシステムを支える看護職の養成という社会的使命を担うものでもあり、日本学術振興会において最高ランクの評価を受けました。

国際交流においても、開学以来、毎年開催している「看護国際フォーラム」や、海外の講師や学生との積極的な交流を通じて、教員や学生の国際的な視野を広げることに努めています。

20周年の節目を迎え、村嶋学長をはじめ教職員など関係者の弛まぬ努力と熱意に敬意を表するとともに、看護教育・研究の充実に一層取り組まれることを期待します。

最後になりましたが、これまで大学の運営に御協力をいただきました県内の医療関係者や経済界の皆様、県民の皆様に深く感謝申し上げ、お祝いの言葉といたします。

祝　辞

大分県議会議長
井上　伸史

公立大学法人大分県立看護科学大学創立20周年、誠におめでとうございます。

貴大学は、「看護学の考究」「心豊かな人材の育成」「地域社会への貢献」を建学の精神として、平成10年の開学以来、保健・医療・福祉などの分野に、1,300名を超えるスペシャリストを輩出していただいています。村嶋学長・理事長や教授陣をはじめ、大学に関わってこられた全ての皆様には、高度な専門知識・技術と心豊かな人間性を兼ね備えた優秀な人材の育成、指導に日夜御尽力をいただき、深く感謝と敬意を表します。

さて、看護職においては、医療の現場のみならず、福祉や介護の現場にも活躍の場が大きく広がっています。近年における医療・介護分野の高度化・専門化に対応し、患者や入所者の方々の様々なニーズに、柔軟かつ適確に応えることの出来る判断力と実践力を養うことがますます重要となっています。

このような中、貴大学では、日本で初めて保健師教育を大学院修士課程に移行し、学部教育は看護師教育に特化するなど先進的・挑戦的な取り組みを積極的に行うとともに、科学的根拠に基づく判断力と看護実践能力の高い看護師の育成に力を注がれてきました。また、地（知）の拠点大学による地方創生推進事業に採択された「看護学生による予防的家庭訪問実習を通した地域のまちづくり事業」では、平成28年度の中間評価で最高のS評価を受けるなど、地域に根ざした大学として地域の再生･活性化に大きく寄与されています。

今後とも、専門的で実践力のある看護師等の養成・教育の充実を図っていただきますとともに、大分県の保健･医療･福祉の向上に、御貢献いただきますよう大きな期待を寄せています。

結びに、貴大学の今後ますますの御発展と、皆様方の御健勝、御活躍を祈念申し上げまして、お祝いの言葉といたします。

祝　辞

大分県医師会 会長
近藤　稔

大分県立看護科学大学が創立20周年を迎えられたことは誠におめでたく衷心からお慶び申し上げます。

教育理念に、豊かな人間性と幅広い視野を養い、科学的根拠に基づいた看護実践能力を持ち且つ地域社会における健康と福祉の向上を掲げておられ敬意を表します。

日本は人口減少・高齢社会を迎え、急性期医療が減少し、慢性期医療、在宅医療・介護を必要とする患者が増加し、訪問看護等の重要性が指摘されています。

2025年には看護職員が約13万人不足すると言われており、厚労省は在宅医療を推進するために、一定の診療の補助が出来る看護師を養成し確保していくために特定行為研修制度を創設しました。貴大学も指定研修機関として研修終了者を養成されており、ご同慶の至りです。

今後高度化・広範囲に亘る医療・介護を提供するためには、チーム医療の推進が要求され、看護職は極めて重要です。また地域包括ケアシステム構築にも訪問看護師の活躍が期待されています。

しかし、全国的に看護師養成機関は減少傾向にあり、大分県でも人口減少と看護職員不足で地域医療・介護は極めて厳しい環境にあります。

貴大学卒業生には看護実践と共に教育者としての役割も期待されています。

医療を提供する環境が厳しい中ですが、医療関係者が協力して国民に安全で良質な医療･福祉･介護を提供することは責務と考えます。

貴大学が20周年を契機に教育理念に基づいて、大分県の医療・看護の提供・充実に貢献されると同時に、日本看護界の指導者の育成にもご尽力され益々発展されることを祈念しお祝いの詞と致します。

祝　辞

公益社団法人 大分県看護協会 会長
竹中 愛子

公立大学法人大分県立看護科学大学が創立20周年を迎えられましたこと心からお喜び申し上げます。

平成10年の開学以来、建学の精神である「看護学の考究・心豊かな人材の育成・地域社会への貢献」のもと、常に大分県の看護界はもちろん日本の看護界もけん引する看護大学であることは、大分県看護協会として大変心強く、また大きな誇りでもあります。

平成20年、日本で初めての大学院修士課程でのナースプラクティショナー（診療看護師）の教育を開始し、平成23年には日本で初めて看護基礎教育の４年制化、修士課程による保健師教育、助産師教育を開始しました。

いずれも少子超高齢社会の進展、疾病構造の変化など医療をめぐる状況の変化に伴い看護に求められる社会のニーズを先取りし、看護界に大きな変革をもたらしたもので、これらを契機に看護界はさらなる進化・深化を進めています。

その後も予防的家庭訪問実習、看護学を通したモノづくり等、常に先駆的な取り組みを行い、その活動は実に誇らしいものであります。

また、私共看護職は、生涯にわたり学習をすることが責務ですが、貴学は、大学教育だけでなく、働く看護職の継続学習を支援する体制を構築し、大分県の新人看護職から看護管理者までの学習を支援していただいています。

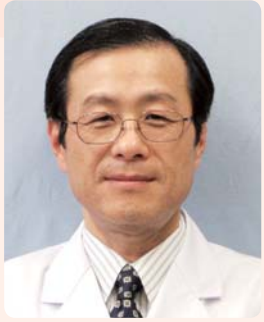
学長はじめ教職員の方々の看護と人材育成に対する熱意により、大分県全体の看護の質向上に大きな貢献をしていただいていることに心からの敬意と感謝を申し上げます。

創立20周年となり多くの卒業生が大分県や全国で看護職のリーダーとして活躍し歴史を紡いでいます。

今後更なる輝きを増し、日本をけん引する看護大学であり続けられますよう祈念してお祝いの挨拶といたします。

祝　辞

大分県立病院 院長
井上 敏郎



大分県立看護科学大学が創立20周年の節目を迎えられたことに対し、心からお慶び申し上げます。

大分県立病院で平成29年12月現在勤務中の大分県立看護科学大卒業生は大学卒業生99名、大学院修了生５名の104名を数えます。多くの優秀な人材を送り出していただいたことに紙面をお借りしてお礼を申し上げます。

大分県立看護師養成施設の歴史は、明治36年に県立病院内に産婆養成所が開設されたことに遡ることができ、さらにその流れは昭和28年に厚生学院開設そして平成10年の貴学の開学へと繋がっていったと聞き及んでいます。その間養成主体は産婆、保健婦、看護婦から学部の看護師、修士課程で保健師、助産師、診療看護師（NP）さらに博士課程での教育・研究者の育成へと発展していることに対して、村嶋幸代学長をはじめとするすべての関係者のご尽力の賜物と敬意を表する次第です。

我が国は少子高齢化の加速により大きく変容しようとしています。

それに対応できる医療福祉の在り方が待ったなしで求められる中、病院では専門領域に精通する認定、専門看護師、病院医療を支える感染防止、医療安全、患者支援、経営分析、経営企画など様々な領域での看護師登用に迫られ、地域では医療と福祉の包括的な連携にも人材が必要となっています。

今後、貴学が専門領域への特化から領域をまたいだ分野やさらに大きな分野を俯瞰できる人材を教育育成し、大分県の医療・保健・福祉の分野で益々貢献していかれることを願って止みません。

末尾ながら重ねて20周年のお祝いを申し上げます。おめでとうございます。

祝　辞

大分県立看護科学大学後援会 会長
後藤 栄一郎

大分県立看護科学大学創立20周年、誠におめでとうございます。

歴代の学長をはじめ職員のみなさま、創立以来、単なる資格取得の場ではなく看護学のトップランナーとしての地位を築いてこられたことに心から敬意を表します。

卒業生のみなさま、大学の価値は卒業生の評価で決まります。医療・保健・福祉の現場で大いに活躍されていることに感謝いたします。

学生のみなさま、たゆまぬ努力を続けておられることに保護者の一人としてたいへん誇りに思います。

そして廻栖野キャンパス周辺地域のみなさま、開学以来温かく見守っていただきましたことに心からお礼申し上げます。

さて、我が国は「超少子高齢化・人口減少」社会となり、人口構造が大きく変化しています。中でも大分県はその変化のスピードが特に早く、看護職に求められる役割や期待も大きく変化しております。

こうした時代のニーズに応えるべく取り組まれた「予防的家庭訪問実習」は、高齢者の健康状態や生活実態などを把握し、地域の高齢者ができるだけ自立して自宅で暮らすことができるよう機能低下予防を行うことによって、地域の再生・活性化に寄与することを目的とした、実に先進的なカリキュラムと言えます。

看護の仕事は知識・技術も大切ですが、何よりも人に対する優しさが大切です。師弟、先輩後輩、友人同士の関係を大切にし、そして地域に根付いた活動を続ける看護大学にはこれからも期待するところ大です。

創立20周年は人間でいえばようやく成人式を迎え、これからますます社会に貢献していかなければならないところです。看護に対する思いがこれからも引き継がれ30周年、50周年と末永く続いていくことを祈念して祝辞とします。

祝　辞

大分県立看護科学大学後援会 前会長
早瀬 康信

創立20周年おめでとうございます。

看護という仕事は「昼夜を分かたず、我らは守る」ということばに尽きると思います。

人々の暮らし、健康、広い意味での生活・社会そのものを、寡黙に必死で守る。この使命感と患者さんの「ありがとう」の一言が、苦しい仕事を喜びに変えます。

この20年1,393名の看護師、修士172名そして博士18名の素晴らしいシードたちが、看護の誇りと使命を胸に、全国各地へ、また世界へと大きく羽ばたき活躍しています。

これらの精鋭は、看護の理論・技術はもちろん、予防の重要性を深く理解し、長期的視野に立ち、地域を見る目を持った1,350名です。

この廻栖野キャンパスに於いて、友情を育み、絆で結ばれた卒業生が、この20年間、幾多の困難を乗り越え「道」を創ってきました。

今、学んでいる学生の皆さんも、これから学ぶであろう未来の学生も、この良き伝統を守り、「看護の道」を、しっかりと育てていくものと確信しております。

BUNGO OITAは、日本の西洋医学発祥の地です。私たちは、医学、看護、国際といったDNAを、そして、何より先取の精神・勇気をもって、事に当たるという美風があります。

この20年培った校風がさらに発展されることを、心よりお祈りいたします。

いつの時代も「輝き続ける」大学を!!

大分県立看護科学大学 名誉学長
草間 朋子

20周年おめでとうございます。

平成10年に野津原（当時は大分郡でした）の地に、ガラス張りの曲線美を誇る研究棟を持つモダンな大学が新設されたことが、つい先日のように思い出されます。

平成４年の「看護師等の人材確保の促進に関する法律」の制定に伴い、県知事さまを始めとした県の関係者、大分県看護協会・看護連盟のみなさまの、並々ならぬご尽力により、厚生学院を大学化して誕生した大学でした。大勢の大先輩たちが期待と熱い思いを持って見守る中、緊張感を持って大分の地を踏んだことを思い出します。

「看護のモデルとなる大学」「学生たちが、自分たちの職業と学問に対してプライドを持つことができ、『看護を選択してよかった』と心から思える教育を提供できる大学」を目指し、学部教育の課程（基礎教育課程）で、自律した看護師を養成しようと決心し学長の任を引き受けることにしました。40年近く続けてきた教育研究領域を離れ、「看護」にどっぷり漬かる初めての機会であり、看護界からは「新人」として受け入れていただきました。

看護の基礎科学を充実させるための「人間科学領域」、看護の基本的役割である「症状マネジメント」ができる看護師を育成するための「看護アセスメント学講座」、国際性を習得するための「国際看護学講座」などは、20年前の看護の学部教育では目新しい取り組みでした。国際看護学講座の初代教授には、韓国ソウル大学の学部長でおられた洪麗信先生をお招きすることができました。当時の日本ではまだ、日本国籍でない方を常勤の公務員にすることは難しい時代でしたが、県の温かい配慮により実現することができました。

開学に当たって、公立大学では珍しい「建学の精神」を当時の平松守彦知事が自ら考え、揮毫してくださいました。この建学の精神は、20年経った今でも将来を視野に入れた素晴らしいものです。

10周年式典の特別講演の折に、鴨下重彦先生（東大名誉教授）が「21世紀は看護師の時代である」とお話しくださり、看護に携わっていくことのエネルギーと誇りをいただくことができました。

「地域の人々に愛される大学」を目指して教職員が一丸となって、開学当初から取り組んだ「野津原健康プロジェクト」は、大分にとって新参者である私共教員にとって、地域を知るとてもいい機会になりました。

JICAの事業の一環として大学を挙げて取り組んだ「ウズベキスタン看護教育改善プロジェクト」では、アルメイダ病院の新築に伴って廃棄された手動式ギャッジベッド100台をウズベキスタンに送り届けるための輸送費700万円を、大分県内の医療機関、商工会議所、県民のみなさまからご寄付をいただくことができ、みなさまの大学に対する温情を身に染みて感じとることができました。

ワラビ取りや、ミカン狩り、温泉巡りなど大分ならではのたくさんの楽しみも経験させていただいた大分は、私にとって、第二の故郷です。

大分は、これからのチーム医療を担っていくNP（診療看護師）の養成を始めた地です。多くの看護関係者が期待を持ってNPの制度化等の動向に注目しております。大分県立看護科学大学は、20年経った今も看護のモデル校であると胸を張って自慢できる大学であると思っております。

20年間のさまざまな経験を大切に、さらに、新たな課題に挑戦し、いつまでも大分県立看護科学大学が、学生にとっても、県民のみなさまにとっても「輝いた」大学であり続けることを期待しております。

世の中では、「地域の時代」であることが強調されておりますが、大都市一極集中でさまざまな物事が進められていることを、地方に出張する度に、実感しております。地域づくりは、人材育成と人材活用がキーワードです。人材育成の機能を持つ大学を拠点に、「地域の時代」を具現化する取り組みを行っていくことが、県立大学の役割ではないかと思っております。

みなさまのさらなるご活躍と大分県立看護科学大学のますますの発展を祈念しております。

祝　辞

大分県立厚生学院 同窓会 草の実会 会長
阿南 和代

大分県立看護科学大学創立20周年を心からお祝い申し上げます。

医療福祉の環境は急速な少子超高齢化で、看護職の担う役割が拡大し、多様化で健康のあらゆる場で支援提供できる人材育成のため、看護教育の大学化が進みました。厚生学院はゆとりと幅広い教育のため早くから看護大学移行を目指し活動、その実現を喜び合いました。

看護科学大学開学以来、看護理論の検証、幅広い領域の高度知識・技術、人間性の育成を目指し初代草間学長始め、教職員の努力と国際交流を通し、柔軟な思考、適格な判断力の育成に力を注ぎ着実に成果を挙げられています。特に地域の医療を担う診療看護師（NP）の必要性を提言、教育を開始、制度化に取り組むなど時代を見据えた先見性と優れた実行力で高い大学評価を得られました。現 村嶋学長は更に学内環境の調和と思考を高め、学生の学力向上と地域に密着した学習をし、１年次から受け持ちケースのかかわりを通し、暮らし、いのち、尊厳への生きた看護実践へ継ぐ学びで、看護基礎教育を４年制、保健師、助産師は大学院で充実した教育を目指し、着実に教育成果を挙げられ優秀校として存在感が大きい。学生は目標に意欲的に取り組み自信を身につけています。

ふり返りますと県立厚生学院は明治の医学開化が進む中、県内医療に対応するため明治36年産婆養成所として開設、時代の変遷に伴い、看護婦、更に保健婦教育が加わり、昭和28年県立厚生学院に統合、保健師、助産師、看護師の総合教育の場として多くの卒業生を送り出し県内外で活躍しています。

厚生学院同窓会は素晴らしく発展された看護科学大学の20年の歩みに感慨一入の思いで心から声援を送り、今後のご発展とご健勝をお祈り申し上げます。

開学20周年に寄せて

大分県立看護科学大学 同窓会 四つ葉会 会長
後藤 成人

私たちの母校である大分県立看護科学大学が、今年開学20周年を迎えることを心より嬉しく感じています。平成25年からは、大学院修了生も四つ葉会会員として迎え、学び舎を巣立った同窓生たちはすでに1,500名以上となり、大分県内や全国各地の病院や地域で活躍しています。

同窓会役員としての活動を通じて、同窓の先輩や後輩の活動を知り、在学生が実習や就職活動などで卒業生と交流する場面に出会うことがあります。そのため、大分県立看護科学大学の輪が確実に大きくなっていることを実感しています。

また、開学10周年以降の同窓会のあゆみのひとつに、大分県立厚生学院の同窓会である「草の実会」との交流が挙げられます。平成25年に、四つ葉会と草の実会、大学が三者共催で始めたホームカミングデイも第5回を数えるほどとなり、双方の同窓生の交流が増してきました。大分県立厚生学院の同窓生はいずれも大分県の看護を牽引してきた方々ばかりであり、私たちにとっては大先輩です。草の実会の方々から学ぶことは多く、後輩育成においても有意義な交流が行われていると感じます。

その他にも、WEBサイトの整備、FacebookやLINEなどのSNSを活用した情報の発信、名簿の整備など四つ葉会の運営スタイルも、時代の流れとともに多様に変化してきています。今後も四つ葉会会員同士の繋がり、草の実会との繋がり、母校との繋がりを大切にしながら、この20年で広がった輪がさらに強い絆で結ばれるように、同窓会が大学と同窓生、草の実会との懸け橋となるよう、一層同窓会の活動に取り組んで参ります。

大分県立看護科学大学が今後も発展していくと共に、同窓生にとって変わらない母校であり続けてくれることを願います。

開学20周年、本当におめでとうございます。

1章

沿革

1992（平成４年）

大分県立厚生学院の将来構想を検討

大分県は平成４年６月に旧県立病院跡地の再開発計画との関連で移転が迫られている県立厚生看護学院（３年制）のあり方を検討するための将来構想検討委員会（委員長＝副知事）を設置した。

この県立厚生学院は昭和28年に保健婦助産婦看護婦学校養成所指定規則に基づいて設立された養成施設で、その淵源は明治36年設立の大分県産婆養成所（１年課程）にまでさかのぼる。

大正13年には大分県立病院付属産婆、看護婦養成所（２年課程）に改編され、県立厚生学院へと至った。28年の設立以来、数多くの看護職を輩出。卒業生たちは県立病院を始め県内の医療機関で看護活動に従事してきた。

1993（平成５年）

看護大学の設置を提案

平成５年８月、県立厚生学院将来構想検討委員会での議論の中から、医療環境の変化や大学志向などを考慮して、厚生学院を発展的に解消して看護大学を開設すべきだ、との提言が県に対して行われた。

すべての準備が整い、最後の会合に

「今後も支援を」
県立看護大設置準備委が会合

四月に開学する大分県立看護科学大学の設置準備を進めてきた大学設置準備委員会（会長・帯刀将人副知事）の会合が二十日、大分市内であった。

委員会は一九九四（平成六）年七月に設置。基本計画や教育課程の編成、施設整備などについて、専門的な視野から検討、調査・研究をしてきた。すべての準備が整い、この日の会合が最後となった。

帯刀副知事が「貴重な意見をいただき、四月に開学できることになった。開学後の円滑な運営など課題も残っており、今後も一層のご支援を」とあいさつ。事務局が新大学の概要や入試について説明した。

委員会の前に、野津原町御楯野（めくすの）に完成した校舎を視察した。

看護科学大は一月二十五日に特別入試、二月十五日に前期一般入試、三月十五日に後期一般入試を実施する。事務局によると、二十五日に実施される特別入試には、二十人の定員に対して、県内の高校生三十八人が応募。社会人を対象にした特別試験にも三十八人の応募がきているという。

▲1998年1月21日 朝刊

県が設置構想
4年制の看護大学
厚生学院を母体に
質の高い人材養成
高齢化の進行に備えて

▲1994年4月7日 朝刊

▲大分県立厚生学院

▲大分県立厚生学院　閉校記念式典

1994（平成６年）

県立看護大学 設置準備委員会を設置

県は平成６年７月、県立厚生学院将来構想検討委員会を発展的に解消して新たに県立看護大学設置準備委員会（委員長＝副知事）を設置。同年８月に開いた２回目の委員会で基本計画案を審議した。

この段階で、平成10年度開校を目指すことや、名称を「大分県立看護大学」（仮称）とし、学科は看護学部看護学科で、１学年定員は80人とする、短大などからの編入学（10人）も３年次から認める、大学機能を地域に開放する「開かれた大学」を目指す、などのアウトラインが示された。

平成10年開校めざして
「県立看護大」で審議
設置準備委 年度内に基本計画

▲1994年8月24日 朝刊

▲完成イメージ図

県立看護大学
29日に起工式

1995（平成７年）

建設場所を野津原町（現大分市野津原）に決定し、用地買収と造成工事が進む

建物の延べ床面積が約１万6,500平方メートル。250メートルのトラックを持つグラウンドやテニスコートなどの施設計画がまとまり、用地買収と造成工事が始まった。

こうした施設面と同時にカリキュラム（教育課程）の編成にも着手。専門科目講座として基礎看護学、臨床看護学、社会保健学などが挙げられ、さらに具体的な編成作業が進められた。

平成10年開学へゴー
県立看護大の起工式

▲1996年7月29日 夕刊

県立看護大学
来月 用地造成に着手
3階建て、緑生かす

▲1995年8月8日 朝刊
◀1996年7月26日 朝刊

1996（平成８年）

初代学長に草間朋子氏が内定

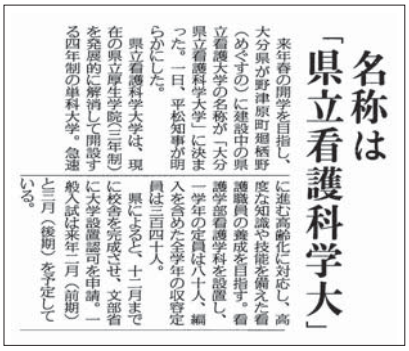
平成８年６月、県立看護大学（仮称）の初代学長に東京大学医学部の草間朋子助教授が内定した。草間氏は長野県出身で、東大医学部衛生看護学科卒。日本赤十字医療センター、東京電力原子力保健安全センターなどを歴任。

内定に当たって草間氏は「地域のニーズに対応できる能力と感性を備えた、保健・医療・福祉の第一線で活躍できる看護職を責任をもって育てたい」と抱負を語った。

1997（平成９年）

正式名称、「大分県立看護科学大学」に決まる

平成９年４月、平松知事は野津原町廻栖野地区に建設中の県立看護大学の正式名称を「大分県立看護科学大学」に決定したことを明らかにした。名前に「科学」を付けたのは、看護の対象である人間、あるいは看護学をより科学的に深く教授、理解してもらう、との思いがこめられている。


名称は「県立看護科学大」

来年春の開学を目指し、大分県が野津原町廻栖野（めぐすの）に建設中の県立看護大学の名称が「大分県立看護科学大学」に決まった。一日、平松知事が明らかにした。

県立看護科学大学は、現在の県立厚生学院（三年制）を発展的に解消して開設する四年制の単科大学。急速に進む高齢化に対応し、高度な知識や技能を備えた看護職員の養成を目指す。看護学部看護学科を設置し、一学年の定員は八十人、編入を含めた全学年の収容定員は三百四十人。

県によると、十二月までに校舎を完成させ、文部省に大学設置認可を申請。一般入試は来年二月（前期）と三月（後期）を予定している。

▲1997年4月2日 朝刊

10年開学の県立看護大

初代学長に草間氏

県立職能開発短大　校長は足立氏

県立看護科学大学

これが"医学の新拠点"

4月開学へ急ピッチ

県立看護大学

「人間科学」など4講座

国際・情報化にも対応

来年4月、認可申請へ

新聞記事［左］1996年6月4日 朝刊
［中］1997年10月10日 朝刊
［右］1996年12月5日 朝刊

1998-2003（平成10～15年）

文部省に設置認可申請書を提出、認可される

平成９年４月24日、大分県は文部省（現 文部科学省）に県立看護科学大学の設置認可申請書を提出した。文部省は５月15日、県立看護科学大学を文部大臣の諮問機関「大学設置・学校法人審議会」に諮問した。

同審議会は現地調査などのうえ、12月12日、県立看護科学大学の設置を文部大臣に答申。文部大臣は同月19日、大分県に対して設置認可書を交付し、平成10年４月の大分県立看護科学大学の開学が決定した。

1998　４月　看護学部看護学科からなる県立単科大学として開学
（学部の入学定員80名、3年次編入定員10名）

４月　第一回入学式

７月　ケースウェスタンリザーブ大学と学術交流協定を締結

９月　ペース大学と学術交流協定を締結

1999　９月　ソウル大学校看護大学（韓国）と学術交流協定を締結

10月　看護国際フォーラムの開始

2002　４月　大学院看護学研究科修士課程（博士課程前期）を開設

2003　７月　セミパラチンスク地域医療改善計画プロジェクト（JICA）に参加

９月　文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム」に選定

▶1997年4月25日 朝刊

県立看護科学大学

設置認可申請書を提出

▶1997年12月13日 朝刊

来春の開学が確定

19日に募集要項発表

◀1998年2月7日 朝刊

推薦20、一般60人

看護科学大の募集要項

▲1997年12月19日 夕刊

4月開学の県立看護大

倍率16・9倍に

前期入試

看護科学大で開学記念式典

学生ら2名入学式出席

1998年6月20日 朝刊

▶1998年2月18日 夕刊

新設の看護科学大

77人が合格

合格者の受験番号を張り出す関係者（県総合庁舎）

▲第一回入学式　1998年4月9日

2004-2007（平成16～19年）

2004　4月　大学院博士課程後期を開設

4月　大学院修士課程入学者の助産師教育（ダブルスクール）開始

4月　看護研究交流センターを開設

7月　ウズベキスタン看護教育改善プロジェクト（JICA）に参加

2006　3月　大学評価・学位授与機構により大学評価基準を満たしているとの認証を受ける（看護系単科大学で初）

4月　独立法人化して公立大学法人となる

2007　4月　文部科学省「大学教育の国際化推進プログラム」に選定

2008（平成20年）

大学院修士課程実践者養成NP（Nurse Practitioner）コースを日本で初めて開設

大学院修士課程実践者養成助産学コースを開設

看護研究交流センターに認定看護師コース（訪問看護）を西日本で初めて開設

2009（平成21年）

大学院修士・博士課程に健康科学専攻開設

2010（平成22年）

大学院修士課程に看護管理者コース開設

大学評価・学位授与機構による２回目の機関別認証評価

学校教育法に基づき、大学評価・学位授与機構による２回目の機関別認証評価を受け、大学評価基準を満たしているとの認証に加え、選択的評価基準A、Bともに目標の達成状況が良好であるとの評価を得た。

2011（平成23年）

学部を看護師教育に特化

大学院修士課程に広域看護学コース開設

大学院修士課程において保健師教育を開始

看護師、保健師、助産師の専門性を強化するための教育の質向上が求められ、平成21年７月に保健師助産師看護師法の教育年限が60年以上ぶりに改正され、保健師と助産師の修業年限が１年以上となった。

本学は全国の看護系大学に先駆け、平成23年度から看護師の基礎教育を学士課程４年間で行い、現代の保健医療福祉の多様なニーズに応えられるようにした。

この学部教育の改革と同時に、保健師、助産師の教育は、大学院修士課程で行い、専門性を強化した教育を開始した。

2012（平成24年）

草間朋子氏が学長退任の記念講演

平成10年から14年間、初代学長を務め、退任する草間朋子氏が平成24年３月22日、退任の特別記念講演「看護の質向上のための大学教育・大学院教育について」を行った。

本講演で草間氏は14年間にわたり全国の看護系大学の中でトップランナーとして「看護教育のモデル」となるよう、学部・大学院における保健師・助産師・看護師教育の改革、特定看護師の養成開始と制度化等、看護界の改革に取り組んだ思いを振り返った。

本学の将来に向けて、保健医療福祉を取り巻く環境は激動の時期にあり、看護の発展を通して県民の健康に寄与するよう、大学の新たな挑戦にエールを送った。

新学長に村嶋幸代氏が就任

大分県立看護科学大学の学長に東京大学名誉教授の村嶋幸代氏（60）が４月に就任した。村嶋氏は福岡県出身で東京大学医学部保健学科を卒業後、同大学大学院で保健学博士を取得、聖路加看護大学等を経て、平成24年３月まで東京大学大学院医学系研究科に教授として勤務していた。

村嶋氏は学長就任にあたって「本学が大分県における看護学の拠点として、教育、研究、社会貢献を通して看護の水準の向上に努め、地域に暮らす人々がより良い生活をおくることができるよう、大学の更なる発展に向けて活動する」との抱負を語った。

2013（平成25年）

文部科学省の「地（知）の拠点整備事業」に採択される

文部科学省は、大学が自治体と連携し全学的に地域を志向した教育・研究・地域貢献を進め、地域の課題解決に繋げる「地（知）の拠点整備事業（COC）」を公募した。本学は「看護学生による予防的家庭訪問実習を通した地域のまちづくり事業」を申請し、全国319校中52校の一つとして採択された。

本事業は、学生たちが大学４年間を通して地域の高齢者の自宅を継続的に家庭訪問し、高齢者の健康状態や生活実態などを把握して、高齢者が自立して長く自宅で暮らせるよう支援する新たな実習として開始された。

看護研究交流センターの組織改編と強化

本学が教育・研究に加え地域貢献を推進するため、看護研究交流センターの組織を強化した。新たに常勤教員を配置すると共に、大学が取り組むべき課題に迅速に対応できるように、同センターは「看護学生による予防的家庭訪問実習を通した地域のまちづくり事業」の事務局をはじめ、⑴NP教育推進チーム、⑵地域交流チーム、⑶継続教育チーム、⑷国際交流・留学生チーム、⑸学術ジャーナルチーム、から構成される新たな組織となり活動の強化を行った。

ホームカミングディを三者で開催

本学と本学同窓会 四つ葉会、厚生学院同窓会 草の実会の三者で、５月の若葉祭時にホームカミングディを開催した。第一回（平成25年５月２日）には、本学開設時の事務局職員であった青野浩志氏から「大分県立看護科学大学と大分トリニータへの想い」のテーマで講演いただいた。

看護科学大

地域の高齢者方訪問

相談、体調をチェック

県立看護科学大学（大分市廻栖野）は、学生が地域の高齢者の自宅を訪問して、健康に関する相談に乗ったり、体調をチェックする事業に取り組む。同大学は「お年寄りの孤立を防ぎ、地域の活性化につながる」。学生は長期間、特定のお年寄りに接することで、内容の濃い実習ができる」と期待している。

事業は大学周辺の富士見が丘団地と野津原に住む75歳以上のお年寄りが対象。異なる学年の4人一組でグループをつくり、1～2カ月ごとに、受け入れを承諾した高齢者方に出向く。

同大学でこのほど事業推進会議の初会合があり、大学の他、地元自治会や行政の関係者約30人が出席。村嶋幸代学長が「より良い事業にしたい」とあいさつし、内容を説明した。

取り組みは「看護学生による予防的家庭訪問実習を通した地域のまちづくり事業」として、本年度、県内の大学では唯一、文部科学省の「地（知）の拠点整備事業」に採択された。年度内に試験的に始め、2015年度から本格実施する。

看護学生の予防的家庭訪問実習事業推進会議の初会合＝大分市

▲2013年11月1日 夕刊

▲消防応援隊結成式

大分県国民健康保険団体連合会と公立大学法人大分県立看護科学大学との連携協力に関する包括協定

大分県の保健、医療、福祉分野で協力し、保健師の研修や地域の活動で連携をはかり、国保の医療データ分析を通して県民の健康増進や医療費の抑制などに役立てることとした。

JICA/モザンビーク国「医療従事者学校教員指導能力強化」プログラム

７月、「医療従事者学校教員等指導能力強化（看護教員）」研修を看護教育研修員８名に実施した。

Dr. Kathy Magilvy 来学「予防的家庭訪問実習」

コロラド大学地域看護学教授のMagilvy博士を招致し、講演会（Circles of Care and Fragmentation of Care Discovered through Ethnography）を催すと共に、新たに採択されたCOC事業への評価・助言を受けた。

大分市CKD（慢性腎臓病）対策事業の推進～ハイリスク者の家庭訪問調査

楽しく健康になれるまちづくり推進事業（豊後高田市）、在宅医療従事者資質向上事業に家庭訪問で取り組む

2014-2015（平成26～27年）

学部に養護教諭（一種免許）養成課程開設

疾患や障害を抱えながら学校に通う児童・生徒が増えて、学校における看護の必要性が高まっているため、平成27年度から養護教諭（一種免許）を養成する教育課程（選択制）を開設した。養護教諭（一種免許）はこれまで県内で取得できる養成機関がなかったが、今回の開設で、学生や地域の期待に応える看護の知識・技術を持った看護教諭の教育が開始された。

看護学生による予防的家庭訪問実習※の全学生の実習開始

平成26年には、大分市の野津原地区と富士見が丘団地に住む75歳以上の方８名の協力を得て、学生33名が実習を行い平成27年度からの全学的な実習に備えた。

平成27年４月から大分市野津原地区と富士見が丘団地で75歳以上の方80名の協力を得て、１年生から４年生計330名が家庭訪問実習を行い、その成果を学生が各地の公民館で地域の方へ報告した。

※平成25年度文部科学省「地(知)の拠点整備事業」採択

全国健康保険協会（協会けんぽ）大分支部と包括協定を締結

大分県の医療・保健分野における人材育成と職域・地域社会の健康増進に寄与することを目的に2016年３月12日全国健康保険協会（協会けんぽ）大分支部と包括協定を締結した。

2016（平成28年）

厚生労働省の「特定行為研修指定研修機関」に指定される

平成26年度の保健師助産師看護師法の改正による「特定行為に係る看護師の研修制度」が創設されたのを受けて、大学院修士課程NPコースの教育カリキュラムを調整し、全国に先駆けて平成27年10月に「特定行為研修指定研修機関」として、厚生労働大臣から指定を受けた。

大学評価・学位授与機構による３回目の機関別認証評価

平成28年度に機関別認証評価と選択評価事項A研究活動の状況と選択評価事項B地域貢献活動の状況について評価を受け、全て高評価であった。

日本学術振興会による予防的家庭訪問実習の中間評価で最高ランクS

平成27年度から全学的に予防的家庭訪問実習を開始し、日本学術振興会による中間評価を受けた結果、最高ランクSの評価を得た。この評価は全国76事業中上位７件であり、大分市野津原地区と富士見が丘団地の皆様のご支援とご協力、学生・教職員の全学的な取り組みの成果であり、関係者の皆様に感謝を伝えた。

2017（平成29年）

学部の科目に「看護とものづくり」を導入

平成29年度から「看護とものづくり」を学部の自由科目として新たに導入。本科目の特徴は、「ものづくり」を学修するにあたって、ワークショップHallowに参加し、他大学（工学系・芸術系）の学生や病院現場等のスタッフ、実際にものづくりに携わる企業の方々と討議し、試作品を作ることである。本科目を通して、ものづくりを体験する教育の場が設けられた。

韓国の蔚山大学校医科大学看護課程との国際交流協定 Memorandum of Understanding（MOU）を締結

2017年７月18日に蔚山大学校と、科学技術の発展、人材育成と能力向上、看護科学への貢献を互いの目的とした国際交流協定（MOU）を締結し、学生交流プログラムを開始した。

大分県中小規模病院等看護管理者支援事業に取り組む

県内の中小規模病院等における看護管理の向上を目指して事業を開始した。本学と大分県、大分県看護協会が主体となり、大分県看護管理者連絡協議会、大分大学の協力を得て、大分県中小規模病院等看護管理者支援協議会を設置、大分県の看護の地域ネットワークを基盤に、平成29年度は豊肥地域で事業を実施した。